慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	権延赤著, 田口佐紀子訳, 『人間毛沢東』
Sub Title	
Author	桐本, 東太(Kirimoto, Tota)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.4 (1990. 12) ,p.155(507)- 158(510)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19901200-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

権延赤著・田口佐紀子訳

『人間毛沢東』

（徳間書店・一九九〇年二月・二八六頁）

桐本　東太

本書は、一九八九年五月に北京出版社から刊行された『衛士長談毛沢東』の翻訳である。全体は、作者の権延赤氏が、かつて毛沢東の護衛を勤めていた李銀橋という人物から生前の毛沢東にまつわる様々のエピソードをインタビューし、これを十二の項目に分かって叙述するという構成をとっている。それらの項目はそのまま、作者が李銀橋氏に発した質問と重なり合うのであるが、「毛沢東の性格の最大の特長は何か」「毛沢東が死に直面した時の様子を見たことがあるか」といった問いに対し、李銀橋氏は、自身が親しく見聞した毛沢東の様々な逸話を紹介することによって答えている。

「毛沢東はその一生を通じ、未来世界に恋をしていた人です。こう言って、お分かりいただけましょうか？」（二四七頁）と述解する李銀橋氏によって語り出される毛沢東のイメージは、一言で要約するならば、革命に一生を捧げた偉大な領袖のそれである。李銀橋氏は言う。

「私の記憶によれば、毛沢東は週に三〇時間以上寝たことはない。時に三五時間眠れば、みんな、酒を飲んでお祝いをするほどです」（二九頁）。これほど睡眠時間を切りつめて政務に没頭した毛沢東であるが、その日常生活は質素きわまりなく、食生活においても、「紅焼肉」（ブタの脂身の料理）を好み、孟宗竹の箸を使い、高級な象牙の箸については「あんまり高級すぎて、わたしには持てないよ」と言って、一度も手にしようとはしなかった。対人関係においては、人情に厚く、かつて自分と交際のあった人が恵まれない境遇におちいっている時には、金銭的な援助を惜しまなかった。しかも李銀橋氏が、「わたしは、毛沢東はお金がいちばん嫌いだったと思います」（二二八頁）と回想しているように、金銭的には潔癖で、そうした援助も自分の給与と原稿料を切りつめながら行なわれた。このように知人を大切にする一方、血縁の者をえこひいきするようなことは絶対に無く、郷里の親戚から就職の依頼があった時にもこれを拒

絶している。娘や息子に対しても同様に厳しい態度で接し、毛沢東の子供であるがゆえにこそ、絶対に贅沢と特別待遇を許さなかったという。

こうした清貧で無私な偉人のイメージは、毛沢東の真実の姿を忠実に再現したものであるというよりはむしろ、現時点において人々が最も望んでいる毛沢東の「実像」を、巨大で多様な一個の人間の生きざまの中からすくいだし、点綴したものであると考えた方が当を得ている。そして、すでに一部の新聞にも報道されているように、こうした毛沢東像が生み出されてくる背後には、急激な開放政策の結果中国に出現した様々の矛盾と、その矛盾の上にあぐらをかきながら一族ぐるみで莫大な富の蓄積に狂奔する共産党の高級幹部に対する、一般の人々の深い憎しみと不満が横たわっているのであろう。

しかし、それならば、本書の記載が毛沢東の評伝として、何ら史料的な価値を有さないまでに虚構の色彩を強めているかというと、そうとばかりも言い切れない。たとえば李銀橋氏は江青について、「今、街で売られている『江青野史』『江青外伝』についてほんとうかどうかと尋ねられるなら、昔から野史・外伝といったものは作り話で、民衆の感情の発露だと思いますね。歴史ではない。作りものです。」（一八七頁）と述べ、さらに一九三〇年代後半の時期に回想の筆を及ぼして、「江青はやはりこの時期に延安に入り、がんばりとおした。このことはやはり認めるべきです」（一八九頁）との評価を下しており、こうした比較的に冷静なかたり口が、本書の叙述に一定の信ぴょう性を与えているように思われる。たとえば李銀橋氏は、毛沢東が現実を正しく認識できず、そのために過ちを犯した点についても、「一九五九年になって、毛沢東はなにかを感じ始め、しだいに心配するようになった。彼はいつも実情を見たいと思っていましたが、それは容易なことではなかった。北京に入って以来、安全面などの点から、彼はますます気ままに行動できなくなっていたのです。」（六〇～六一頁）と述べ、最高権力者の宿命といってもよい、自由な行動の制約とそれにともなう情報の封鎖が、彼の判断を誤らせる一因になったのだとしているが、これをかつての主人に対する盲目的な弁護であるとだけは言い切れない。ちなみに李銀橋氏は、毛沢東が「一面ではほんとうのことを知りたがっていたものの、ほんとうのことを話す同志に対しては、自分の考えと違う意見を述べるとこれを受け入れない。この態度は、嘘やホラの氾濫を助長させることにな

ったし、いろいろなペテン師にチャンスを与えることになった」（六六頁）と付け加えることを忘れていない。こうした毛沢東の身勝手さはすでに広く知られているところであろうが、本書の醍醐味は、そうした彼の性格が、日常的な何気ない出来ごととからみあいながら生き生きと描き出されている点にある。たとえば「毛沢東は雪が好きでした」。しかし「彼の雪の愛し方は身勝手でしたね。自分の家の雪は踏まないのに、外の雪は平気なんです」（一二三頁）といった具合いである。

ただこうした毛沢東の日常の挙動は、たとえそれが回想者によって正確に報告されていると仮定した場合においてすら、毛沢東の真の意図をただちに表明しているとは考えられない場合もある。たとえば毛沢東は一九五八年に七里営人民公社を視察、その際に発した「人民公社はすばらしい」という一言が新聞に大々的に報道され、これが後の政治の動きに少なからぬ影響を及ぼしたことは周知の事実であろうが、李銀橋氏はこの一件が全くのアクシデントであり、思わず口走ってしまった言葉が新聞に掲載されているのを発見した時の毛沢東の周章狼狽ぶりを述懐している。しかし人間とは演技する動物である。しかも一流の役者でなければ生きてゆくことすら困難であった中国の実情に思いをいたすなら、政治という高度な演劇性を帯びた世界に身を置くことになった中国人が、政治の表舞台とは一応切り離された日常の空間においてすら、役者であることをやめようとしなかった可能性は充分に考えられる。「人民公社はすばらしい」の一言が何ら他意なく発せられた言葉であることを、あわてふためくことによって自分の護衛に表現する毛沢東の姿のなかに、演技者の影を読み取るのはあながち牽強付会ではあるまい。このように考えてみるならば、自分の子供達に対してことさらに厳しかった彼の態度も、「公人」としての毛沢東一流の演技であったと見られはしないだろうか。

言うまでもなく、こうした推測は何らの傍証をともなうものではないから、充分な説得力を備えてはいない。しかし、日本人の中国観の歪みが一つには、中国人がおりにふれて示す巧みな演技をそのまま真に受けてしまう単純なまでの純粋さから生じていることは、心にとめておいて良いことではあるまいか。最後に一つだけ例を挙げるなら、竹内実氏は本書に序文を寄せ、その中で、「毛沢東の護衛兵として、十五年間側近にあった李銀橋は、あきらかに民衆である。素撲で、正真で、しかも自

分を失っていない。このような人間が、中華世界の民衆なのである」と述べられている。竹内氏の李銀橋氏に対する評価の当否はしばらくおくとしても、このような純粋きわまりない「民衆」観が、かつて文化大革命の時期にあっては、中国の現実に対する理解に大きな狂いを生じさせ、一九八九年の天安門事件に際しても、弾圧された「民衆」の側に「正義」の二文字しか読み取れなかった日本人の中国認識に通底していることは否定できない。とにかく今日の状況下で本書を一読することは、様々のことを我々に考えさせてくれる。その意味で、大変に興味深い一冊である。